



八王子盲学校だより



令和7年11月発行 第7号
東京都立八王子盲学校長 田島 由紀子

ゆっくり読む時間が、心を育てる

校長 田島 由紀子

秋の深まりとともに、静かな時間を過ごしたくなる季節がやってきました。木々の色づきや澄んだ空気に包まれながら、心を落ち着けて本を開く—そんなひとときは、忙しい日常の中で、かけがえないものです。

最近、「タイパ(タイムパフォーマンス)」という言葉をよく耳にします。限られた時間の中で、いかに効率よく成果を得るかを重視する考え方です。動画の倍速視聴や要約アプリの活用など、情報を短時間で処理する工夫が広がる一方で、「じっくり味わう時間」が減っているように思います。

もちろん、効率を意識することは現代社会において必要な力です。しかし、すべてを効率で測ってしまうと、思考の深さや感情の豊かさが置き去りにされてしまうこともあります。特に子どもたちにとっては、「じっくり読む」「時間をかけて考える」「じっくり感じる」経験こそが、心と知性を育てる土台になります。

ミヒヤエル・エンデの名作『モモ』は、1973年に書かれた作品ですが、今なお色あせることなく、現代社会への鋭い問いかけを含んでおり、改めてその価値が見直されています。特にコロナ禍を経て、人と人との関わりや「じっくり味わう時間」の大切さが再認識される中で、『モモ』は多くの人々にとって心に響く作品として再評価されています。

物語の中で、時間を盗む「灰色の男たち」に立ち向かう少女・モモは、人の話にじっと耳を傾けることで、彼らの心に失われた時間とぬくもりを取り戻していきます。灰色の男たちは、効率やタイムパフォーマンス(タイパ)を重視するあまり、心のゆとりを忘れかけている現代人の姿を象徴しているようです。そんな彼らに立ち向かうモモの姿は、私たちが見失いがちな「じっくりと人と向き合う力」の大切さを、静かに、そして力強く教えてくれます。

読書もまた、そうした力を育む営みです。例えば物語を読むとき、物語の世界に入り込み、登場人物の心の動きに寄り添いながら、自分自身の考えや感情と向き合う—それは、思考力や想像力、そして感受性を育てる時間です。読書には、タイパでは測れない「心のパフォーマンス」があります。学校では、読書活動を通じて幼児・児童・生徒たちが「読むことの楽しさ」だけでなく、「考えることの面白さ」にも出会えるよう、日々工夫を重ねています。

本との出会いは、時に人生の転機となるほどの力をもっています。読書は、年齢や立場を問わず、自分自身と向き合う静かな時間を育みます。慌ただしい日々の中でこそ、本を開くことで心が整い、思考が深まります。

この秋、一冊の本とじっくり向き合う時間を、ぜひ意識してみてください。ページをめくるひとときが、人生の節目にそっと寄り添ってくれるかもしれません。



日常生活動作の学習について

自立活動担当 菅井みちる 工藤克明

自立活動では、発達段階や実態に合わせて、日常生活動作の学習を行っています。日常生活動作とはADL(Activities of Daily Living)とも言われ、視覚に障害のある児童・生徒が自立して主体的に生活するために必要な技能になります。箸等の食具の使い方、衣服の着脱や畳み方、紐結び、コンロや電子レンジ等を安全に使用するための熱源操作、食材を安全に切るための包丁操作、レンジ等を使った簡単な調理法、洗濯の仕方、掃除の仕方等、幼稚部から高等部まで学部を越えて段階的にまた継続的に指導しています。また、歩行の学習と併せて、ひとりで買い物をして簡単な調理をするなど複合的な内容にも取り組んだりしています。そこで必要になってくるのが、普段の生活経験から得られる知識と技能です。日常生活動作は、自立活動の時間だけで学ぶのではなく、家庭の中での実践がとても重要になります。実践と言っても難しいことを行うのではなく、例えば、一緒に料理をしたり、洗濯物を畳んだり、一緒に買い物に行ったり、生活の中で行われている活動に取り組んでいただければそれで十分です。特に買い物はお金を払うだけでなく、どんな物がどのぐらいの値段で売られているか知ることが重要です。そうすることによって、値段が高いのか安いのか経験的に理解していくことができます。スーパー等に行きく時はぜひ児童・生徒と一緒に行っていただき、買い物の経験を積んでほしいと思います。調理に関する熱源操作や包丁操作も安全にかつ確実にできるようになるには日頃の経験の積み重ねが大切になってきます。何回も繰り返し取り組むことで、徐々にそのコツを身に付けることができます。ぜひ御家庭でも日常生活動作を向上させるために、いろいろなことに取り組んでいただければと思っています。

校地・校舎の歴史

校舎改築プロジェクト 野村利己

昨年秋から始まった旧校舎解体工事も無事終了し、現在は「ひとやすみ」の状態となっています。そこで、今号では校地・校舎の歴史を少し振り返ってみたいと思います。

本校学校要覧の沿革には、以下のような記載があります。

- ・昭和 5年4月27日 第1回入学式挙行並びに授業開始。
- ・昭和12年6月20日 台町237番地の新校舎に移転。
- ・昭和20年8月 2日 戦災により校舎全焼。
- ・昭和20年9月15日 臨床実習室において授業を開始。

本校は昭和5年に開校し、当初は上野町にあった市立商業公民学校(夜間制)の4教室を昼間だけ借りて授業を行っていました。その後、紆余曲折を経て、昭和12年に現在の場所に校地を構え自前の校舎を建築することができました。自らも視覚障害があり地元の素封家であった立川吉五郎氏から、氏が所有する畑地500坪の土地を寄贈していただき、校舎は地元の土木建築業者青木孝太郎氏の全面的な寄付によって建てられました。たまたま八王子市立第七小学校の校舎改築があり、その解体木材を使用して校舎を建築されたそうです。

その校舎も昭和20年8月1日夜半から翌2日未明にかけて起きた八王子空襲により、わずか20坪の臨床実習室を残し、他はすべて焼失してしまいました。夏休みだったこともあり、八王子盲学校では犠牲者が一人も出なかったことが不幸中の幸いでした。そして、終戦からまだ一か月しか経たない9月15日には、焼失を免れた臨床実習室で授業が再開されており、関係者の想像を絶する御苦勞を窺い知ることができます。

さまざまな御縁と多くの方々のお力添えにより現在の八王子盲学校があることに感謝し、これからも地域に愛される学校を目指して参ります。引き続き御支援・御協力をお願いいたします。